

関東地方の与格助詞「げ」の起源について

佐々木 冠（立命館大学）

1. はじめに

関東地方には標準語で「に」が使われている形態統語的環境でゲという格助詞が使われている地域がある。「オメゲ コレ ヤル」（お前にこれをやる）のような文で使われるゲである。このようなゲを与格助詞ゲとここでは呼ぶことにする。与格は受け手や間接目的語を表す名詞句の形式に対応する名称である。与格助詞ゲは千葉県、茨城県、埼玉県、栃木県の一部で用いられている。本稿では、茨城県および千葉県で行った調査で集めたデータをもとに与格助詞ゲの起源について考察する。なお、本稿の内容は北海道方言研究会第208回例会および第211回例会、日本方言研究会第100回研究発表会で話した内容をまとめたものである。

本稿の構成は以下の通りである。第2節でこれまでに提案されている与格助詞ゲの起源に関する二つの分析を紹介する。第3節では、調査で収集した与格助詞ゲのデータとこの形式に関連するデータを示す。調査地域の一部ではゲが与格助詞ではなく「～の家」を表すところがある。第4節で、与格助詞ゲと「～の家」を表すゲの両方の歴史的起源について分析を提案する。

2. 先行研究

関東地方で用いられている与格助詞ゲの起源については、これまで二つの説が提案されている。森下(1971)によって提唱されたガリ起源説と、井上(1984)などに見られる複合格助詞起源説である。以下に二つの説を紹介する。

2.1. ガリ起源説

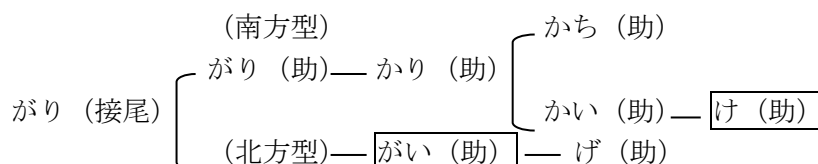
森下（1971）は、関東地方のゲ、九州地方のゲ、ケ、琉球列島のカチ、（ン）カイが上代語の方向を表す「接尾語」ガリに由来するという分析を提案している。上代語のガリは、以下の例が示すように、人間を表す名詞に後接し、名詞＋ガリは方向性のある動作を意味する動詞の補語の位置に現れていた。

(1) ひろ橋を馬越しがねて心のみ妹我理遣りてわは此処にして（万葉集, 3538）

森下（1971: 29）はガリの性質について次のように述べている。

本来、「がり」は所・許を表わすことから「心のみ妹我理やりて」（万・三五三八）の我理は方向の接尾語とも解せられ、助詞的性格は濃厚であった。したがって「がり」が中世の半ば頃から格助詞「に」と平行して話しことばとして使われるようになるとその機能を失い、混乱するようになって「がり」そのものが格助詞としての性格を持つようになった。

そしてゲへの変化を以下の図のように描いている（原文では縦書きだが、横書きに変えてある）。関東のゲは北方型の変化を経た要素とされている（森下 1971: 33）。



琉球列島の方格助詞の起源を上代語のガリに由来するという分析は板橋(1990, 1991)にも受け継がれている。一方、野原(1998: 55)は琉球語の(ン)カイに関して「向ひ」を起源とする説を紹介している。

関東地方と九州・沖縄地方で用いられているカ行音・ガ行音を含む与格助詞の起源の説明としてガリ起源説が妥当であるならば、九州地方と東北地方で用いられているサマに起源をもつ方位格助詞と同様の周囲分布の例ということになる。すでに紹介したように琉球語の(ン)カイについてはガリ起源説とは異なる説明も提案されており、森下(1971)のガリ起源説は必ずしも広く受け入れられた説とはいえない。とはいえ、『日本国語大辞典』でも同様の説が展開されているので、決して無視できる説ではない。

2.2. 複合格助詞説(ガ+イ)

井上(1984: 194)は埼玉県全件で標準語の「に」に当たる表現としてゲーが用いられていることを指摘したうえで、「ガ+イにさかのぼる」としている。埼玉県のイは標準語の「へ」に対応し、ガは所有格として機能するので、この説明は、与格助詞ゲが「所有格助詞+方位格助詞」に遡るとする分析といえる。この分析を複合格助詞説と呼ぶことにする。

関東地方には複合格助詞に起源を持つ格助詞を持つ方言がある。千葉県全域、茨城県南西部、埼玉県南東部で用いられているガニは「オレガニ ワカンネ」(私にはわからない)のように経験者を表す格助詞である。この格助詞は所有格助詞ガと位格助詞ニの組み合わせが固定化したものである。このような格助詞が関東地方にはあるので、他にも複合格助詞に遡る格助詞があってもおかしくはない。

また、「ガ+イ」にふくまれる/ai/が[e:]または[e] (エーまたはエ)に変化することも関東地方の方言ではよく見られる。否定の「ない」がネーになる方言が広く見られる(カカネー「書かない」)。したがって、ゲが「ガ+イ」に遡るとする分析は音韻的に根拠がある。

この節で紹介した与格助詞ゲの起源に関する二つの説は一定の説得力を持っている。二つの説とも「~のもと(へ)」「~へ」という方向性を含意する要素を起源に含んでおり、現在使われている与格助詞ゲと起源の要素に意味的な共通性がある。

意味的な側面では二つの説は甲乙つけがたいが、音形の説明としては複合格助詞説に軍配が上がる。ガリ起源説をとると、ガリからゲに変化する途中でガイという音形の段階を経る必要がある。「鳥」が/tui/になる琉球語の諸方言と異なり、関東地方では最終音節の/i/の前での/r/の脱落は一般的な現象ではないので、gari から gai への変化を想定することには独立した根拠がないことになる。複合格助詞説にはこのような無理がない。

では、複合格助詞説で関東地方の与格助詞ゲと関連する語形を説明することができるのだろうか。この問題について考察するために、次節では与格助詞ゲと関連する語形のデータを示す。

3. 与格助詞ゲと関連する語形

この節では、調査に基づき、茨城県と千葉県における与格助詞ゲの分布、ゲの後ろに他の格助詞が接続する構造の2点について報告する。この節で紹介する事実をもとに次の節で格助詞ゲの起源について新しい分析を提案する。

3.1. 与格助詞ゲの分布

2012年から2014年にかけて行ってきた調査で「俺にくれ」の「に」に対応する箇所では与格助詞ゲを使うと答えた地域は次の通りである。述語の「くれ」は「クロ」になる場合が多数を占めた。なお、下記の分布に関するデータには2010年に先行して行った調査で得た回答も反映されている。

茨城県：古河市高野；坂東市（逆井、山）；境町上小橋；常総市（鴻野山、曲田、大生郷町、本豊田、水海道本町、上蛇町、水海道三坂新田町、菅生町）
千葉県：野田市（吉春、木野崎、木間ヶ瀬）；南房総市（和田、白浜、千倉、富浦、富山、丸山、三芳）

茨城県と千葉県の他の地点でも調査を行った。上記の場所以外では、「俺にくれ」の「に」に対応する箇所では二またはサが用いられていた。

与格助詞ゲは常にゲと発音されるわけではない。千葉県では、沿岸部に与格助詞が/ge/の方言が分布し、旧三芳村（南房総市）などでは/gya/（仮名標記ではギャー、音声的実現は[ŋča]）が用いられている（樋口 2005）。旧三芳村の方言では、中央方言の/ai/, /ae/が/ya/に対応する（樋口 2003）。これらの事実から、関東の与格助詞ゲが/gai/または/gae/という形式から生じたことがわかる。

3.2. 名詞＋ゲに格助詞が後接する構造

茨城県内と千葉県内では、間接目的語（「俺にくれ」の「俺に」）を表す際に、ゲニまたはゲサを名詞に後接させる地域がある。

常総市（旧石毛町）鴻野山では「孫に小遣いをやる」を下の例文のようにいうことがある。なお、この方言では二を外して「孫ゲ」にしても小遣いの受け手を表すことができる。

(2) 孫ゲニ コツケー（小遣い）ヤル。

水戸市全隈で、「俺にくれ」に対応する表現を聞いたところ、以下に示す文を教えていただいた。常総市ではゲが与格として用いられることが多いが、水戸市ではゲが与格助詞としては用いられない。間接目的語は二またはサで表されるのが一般的である。水戸市全隈の話者によれば「オレゲ」は「私の家」を意味する。つまり「オレゲ」だけでは「俺に」の意味にならない。したがって、下記の文は正確には「俺の家にください」の意味がある。赤城(1991)によると、人間名詞＋ゲが「～の家」を意味する方言は茨城県に広く分布している。なお、クンチョは「ください」に対応する丁寧な表現である。

(3) オレゲサ クンチョ

茂原市茅場では「私の家に来なさい」を次のように表す。そして、オラゲはここでも「私の家」を指す。

(4) オラゲサ コーヨ

位格助詞ニおよび方位格助詞サが後接していることから名詞＋ゲが名詞的な要素であることがわかる。また、前述のようにオレゲ／オラゲが「私の家」を意味するということは、この表現の中に「家」を意味する要素が含まれていることを示唆する。

水戸市全隈のゲと茂原市茅場のゲは明らかに与格助詞ではない。名詞＋ゲだけで間接目的語や着点として用いられないからである。一方、常総市鴻野山のゲはそれがついたかたちだけでも間接目的語として用いられるので与格助詞としての用法を持っていると考えることができる。ただし、常に名詞にゲが付いた構造になるのではなく、さらにそのあとに位格助詞ニが付いた構造で間接目的語になることもあるので、常総市鴻野山の方言は、常に間接目的語が名詞＋ゲとなって

いる方言と「～の家」の意味のゲを持つ方言の中間的な位置づけと考えるのが適切と思われる。

与格助詞ゲの起源を考える際、この節で挙げた三つの方言の構造をも考慮に入れる必要がある。名詞＋ゲが常に間接目的語として解釈される方言、間接目的語が名詞＋ゲと名詞＋ゲニの間で揺れている方言、そして名詞＋ゲは「～の家」を意味しそれ自体では間接目的語になることができない方言、これら三つのタイプの方言への発展を説明するには、所有格助詞ガと「家」を表す名詞の組み合わせがゲの起源であると考えられるように思われる。「～の家」を表すゲは起源の意味的特徴を継承したものであり、与格助詞ゲは所有格助詞ガ＋名詞「家」が与格格助詞として再解釈されたものと考えられる。次節では、両者への展開のあり方を示す。

4. 所有格＋「家」から与格助詞および「～の家」を意味する接尾辞への展開

所有格助詞ガと「家」を表す名詞から関東地方のゲが派生したと考えることは、起源に含まれる要素の意味をストレートに反映した水戸市全隈や茂原市萱場のゲを説明する上でも有効であるし、後述するように格関係を表す要素が名詞に起源を持つことは様々な言語で認められることなので、与格助詞ゲへの変化を説明する上でも無理がないと考えられる。この節では、与格助詞ゲと「～の家」を意味するゲへの分岐について考察する前に、与格格助詞ゲと「～の家」を意味するゲの文法上の位置づけを示す。

4.1. 格助詞のゲと接尾辞のゲ

ここでは、常総市大生郷の話者と茂原市萱場の話者から得たデータをもとに二つのゲの文法上の位置づけについて考える。常総市大生郷の話者にとってゲは与格助詞であり、「～の家」の意味はない（この点では常総市鴻野山の方言と同じである）。常総市大生郷では「～の家」は「～チ」で表す。茂原市萱場の話者にとってゲは「～の家」を表す形式である。以下のデータは、二つの方言でゲが意味においてだけでなく文法上の位置づけでも異なることを示している。

- (5) 常総市大生郷
 - a. オメゲダケ クレッカラ（お前にだけ与えるから）
 - b. オメダケゲ クレッカラ（お前だけに与えるから）
- (6) 茂原市萱場
 - a. オラゲニダケ アル タカラモノ（私の家にだけある宝物）
 - b. オラダケゲニ アル タカラモノ（私の家だけにある宝物）
 - c. *オラダケゲニ アル タカラモノ

名詞にある形式が付属する場合、その形式が接尾辞である場合と助詞である場合がある。接尾辞と助詞はともに何か別なものに付属することによってはじめて発話の中に現れることができる独立性の低い要素である。接尾辞と助詞では、接尾辞の方がより独立性の低い要素であり、助詞は接尾辞と単語の中間的な位置づけであることから附属語とも呼ばれる。服部（1950）の附属語の認定基準のⅡは、二つの形式の間に別の単語が割って入る場合、両者は単語であるというものである。単語には附属語（助詞）も含まれる。常総市大生郷の方言では、ゲと名詞の間に副助詞ダケを挟むことが可能である。したがって、この方言のゲは助詞と見なすことができる。

一方、茂原市萱場の方言では、名詞とゲの間に副助詞ダケが入る構造(6c)が許されない。したがって、この方言のゲは（格）助詞ではない。一方、(6a-b)の例から名詞とニの間には副助詞ダケが入るので、ニが格助詞であることがわかる。茂原市萱場の方言のゲは名詞に付属して「～の家」という意味の名詞を派生する接尾辞と見なすことができる。単語と助詞の境界を「=」で示し接尾辞と前接する要素の境界を「-」で示すと、(5a-b)と(6a-b)の文法構造は次のように表すこと

ができる。アルファベット表記は音素表記に対応する。母音間閉鎖音の有声化などの音韻プロセスは表記に反映させていない。

- (7) a. ome=ge=dake kure-Q=ka (5a)
b. ome=dake=ge kure-Q=ka (5b)
- (8) a. ora-ge=ni=dake ar-u takara-mono (6a)
b. ora-ge=dake=ni ar-u takara-mono (6b)

4.2. 格助詞ゲと接尾辞ゲへの展開

所有格格助詞と「家」を表す名詞から格助詞ゲと接尾辞ゲへの展開は図1に示すものであったと考えられる。NP は名詞句を表し、PP は後置詞句を表すものとする。日本語の格助詞は形態論的には助詞であり、句構造（文の構造）上の位置づけとしては後置詞と分析される。単独の N と P はそれぞれ名詞と後置詞に対応するものとする。

図1（次ページ）では千葉県と茨城県の方言で一般的に見られる音韻変化だけを用いて形式の変化を説明している。中央方言で/ai/で現れる音連続が千葉県と茨城県の方言で/e/で現れるのは広範に見られる現象である。句の境界を越えて/a/と/i/が融合を起こすのは一般的ではないが、所有格助詞と「家」の結びつきが強くなり固定化して間に他の要素が入らなくなったために/a/と/i/の融合が生じたものと考えられる。標準語では「私の小さな家」のように「私の家」の「私の」と「家」の間に他の単語（「小さな」）を挟むことができますが、これは所有格と「家」の結びつきが固定化していないためである。第一段階から第二段階に移行する過程で所有格助詞と後続する「家」の一体化が進んだと考えられる。

ゲの文法上の位置づけが方言ごとに分岐するのが第三段階である。この段階で「家」が単語としてのステータスを失うわけだが、所有格助詞と「家」に由来する要素、すなわちゲが附属語（助詞）としてのステータスを失う方言とそれを維持する方言に分かれる。

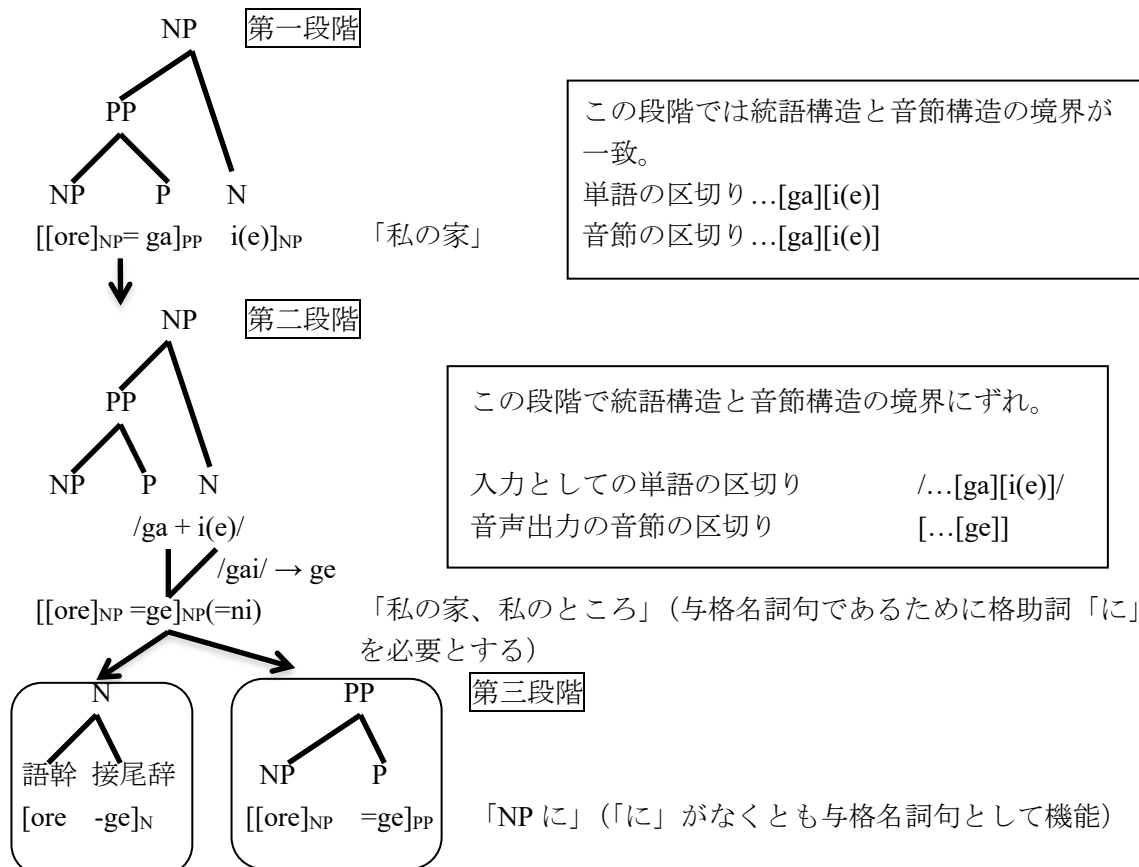
所有格助詞ガは前接する名詞との間に副助詞ダケが挟まる構造を許す。以下の例は常総市大生郷の方言の例である。(9)のダケとガは順序を入れ替えることができない。ダケガはよいが、ガダケとはできない。

- (9) ome=dake=ga moN=zja ne: 「お前だけのものではない」

茂原市萱場の方言に見られるゲは語源的には所有格助詞ガを含んでいるが、(9)に示した構造に並行的な構造をとることができず、ホストとなる名詞に直接後接することは、(6c)に示したとおりである。茂原市萱場の方言のゲの独立性の低さがこのことからわかる。「～の家」という意味を継承しつつ、ゲが「語」としてのステータスを失ったのが、茂原市の方言などに見られる接尾辞ゲなのである。一方、所有格助詞ガの助詞としてのステータスは継承しつつ意味の面で「家」を指す機能を失い、そして、「家」の持っていた名詞としての性質も統語構造に反映されなくなり、全体として位置関係を表すようになったのが、常総市や南房総市などの方言に見られる与格助詞ゲと考えられる。

「家」を表す要素から位置関係を表す要素への変化は、意味的にも無理のないものと考えられる。文法化の通言語的研究である Heine & Kuteva (2002: 174–177)は、家庭や家を表す名詞が場所格に変化する例を複数の言語で示している。彼らの示している例で我々に最もなじみのあるものはラテン語の *casa*（家）に起源を持つフランス語の前置詞 *chez* であろう。

図1 所有格+「家」から格助詞ゲと接尾辞ゲへの展開



ここで一つ疑問がわく。与格助詞ゲは位置関係を表す要素ではあるが、フランス語の *chez* のように単に位置を表す要素ではない。与格助詞ゲが付いた名詞は受け手と解釈されるので、方向性に関して中立的ではなく、「～へ向かって」という方向性を意味的に指定されている。一方、「～の家」を表す接尾辞ゲにはこのような方向性の指定はない。以下に示す茂原市萱場の方言の例から明らかなように、カラやマデといった格助詞の付加によって「名詞+ゲ」は起点を表すことも着点を表すことも可能である。「～の家」を表す接尾辞ゲをもつ方言では、方向性に関する中立性を起源である所有格助詞+「家」からそのまま継承している。

- (10) オメラ-ゲ=カラ オラ-ゲ=マデ ドンケ カカル=カ=ナ
 「お前たちの家から私の家までどのぐらいかかるかな」

ニヤサが付かない「名詞+ゲ」が与格助詞になった変化の背景には、茨城県と千葉県で話されている方言でしばしば着点を表す名詞句が無助詞になる傾向があると考えられる。以下の例が示すように、着点を表す要素への方位格助詞サの付加は随意的である。

- (11) doko (=sa) ik-u (~ig-u)? 「どこに行く」

上の文の方位格助詞サが存在する構造とそれが省略された構造を立体的に示すと次のようになる。V は動詞を表し、VP は動詞句を表すものとする。図2 が省略のない構造で図3 が省略のある構造である。両者はともに行き先を尋ねる文であり、ドコは着点として解釈される。ドコの着点としての解釈は省略された方位格助詞によって保証されるものと考えられる。

図 2

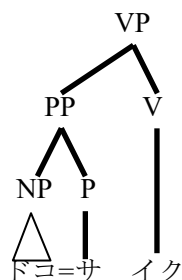
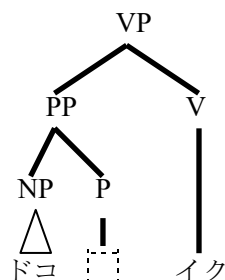


図 3



同じように省略された格助詞によって方向性の解釈が保証されるということが、図 1 の第 2 段階で生じた可能性がある。(2)の常総市鴻野山の例文は調査協力者によれば位格助詞ニを省略しても可能だそうなので、それを例に名詞の後にゲニがついた構造とゲだけが付いた構造を図示する。図 4 が位格助詞ニがある構造で、図 5 が省略された構造である。図 4 と図 5 の構造が第 2 段階のものであるならば、ゲは抽象的なレベルでは所有格+「家」なので、被修飾要素である「家」が名詞であることから、P ではなく N のラベルを貼った。

図 4

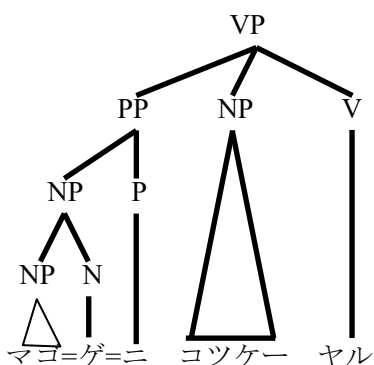


図 5

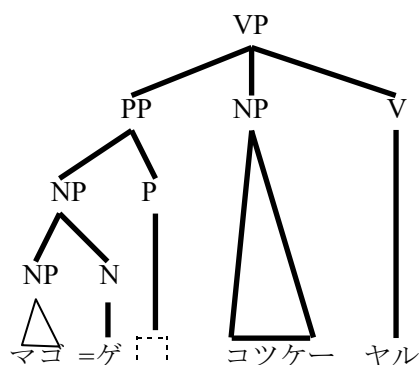


図 5 のマゴが小遣いの受け手として解釈できるのは、省略された格助詞の貢献によるものと考えられる。第 2 段階から第 3 段階に移行する際に図 5 の構造が固定化してゲが格助詞として再分析された方言が与格助詞ゲを持つ方言と考えられる。与格助詞ゲを持つ方言では、図 5 と異なり、ゲの品詞のラベルは N ではなく P になっており、先行する名詞とゲの組み合わせは NP ではなく PP と解釈される。

先行研究で提唱された関東地方のゲの起源に関する二つの節ではゲの後ろに格助詞ニまたはサが付属する構造は説明が困難である。森下（1971）が述べるように上代語のガリ自体が助詞的な性質を持つとすれば、その後継であるゲの後ろに格助詞が続く構造は意味的に余剰性が高く不経済である。したがって、ガリ起源説は、第 2 節で述べた音韻的な問題以外に文法的な側面でも問題を抱えていると言わざるを得ない。複合格助詞起源説の場合も同様である。ゲが所有格助詞ガと方位格助詞イに遡るのであれば、さらに方位格助詞サを加えるのは意味的に余剰である。上で展開した所有格+「家」起源説では、このような意味的余剰性の問題は生じない。それゆえ、図 1 に示した所有格+「家」起源説が現時点ではゲの起源に関する最も説得力のある分析と考えられる。

5. まとめ

日本列島の各地に分布する形式的に類似する形式が単一起源であるとする分析は魅力的である。しかし、各地方の方言の言語事実を説明する上で困難が生じる場合がある。本稿で示した所有格

＋「家」起源説は、関東地方の方言にしか当てはまらない。したがって、ゲに関する複数起源説の一つといえる。

ゲに関する複数起源説として、山形県鶴岡市小名部の与格助詞を扱った荒井（1996）がある。荒井（1996）は、小名部方言の与格助詞にゲとナゲというヴァリエーションがあることや近隣地域でゲとドゲというヴァリエーションがあることを根拠に、「～（ノ）トコロエ（のところへ）」からこの地方のゲが発生したとする分析を展開している。荒井（1996）は、森下（1971）の単一起源説を検証する中で、上の分析を提案している。

佐々木（1997: 24）はゲが日本列島各地に点在することから「相当古い時代の残存形ということとは推測できます」と述べている。この推測は日本列島各地の機能的に類似するゲがすべて上代語のガリあるいはそれに関連する語形に由来することを前提としている。しかし、本稿や荒井（1996）の分析が正しいとすれば、機能的に類似するゲの中には比較的最近形成されたものがあることになり、しかもそれが用いられている地域によりその起源が異なる可能性がある。単一起源説は魅力的な分析ではあるが、性急さにより言語事実を分析し誤る恐れがある。それぞれの地域の方言で妥当性の高い分析を行っていくことが日本語の歴史を解明する上でも妥当な方法と考えられる。

参考文献

- 赤城毅彦 (1991) 『茨城方言民俗辞典』 東京堂出版.
荒井孝一 (1996) 「小名部方言の与格について」『国文学 解釈と鑑賞』 61(7): 120-129.
井上史雄 (1984) 「埼玉県の方言」『講座方言学 5 関東地方の方言』 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編、169-202. 国書刊行会.
佐々木英樹 (1997) 「総論」『千葉県のことば』 平山輝男編、1-38. 明治書院.
服部四郎(1950) 「附属語と附属形式」『言語研究』 15. 1-26.
樋口正規 (2003) 「もうひとつの房州方言」『ちば：教育と文化』 64: 103-108.
樋口正規 (2005) 「房州方言の諸相 (3)」『ちば：教育と文化』 67: 119-127.
森下喜一 (1971) 「方言にあらわれる格助詞「げ」について」『野州国文学』 7: 21-35.
Heine, Bernd & Tania Kuteva (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*, Cambridge: Cambridge University Press.

謝辞

本発表のもとになった調査を行うに当たり、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（C）、課題番号：24520418）の助成を受けた。貴重なデータを教えてくださった皆様に感謝する。